

歴史問題と「和解」を考える ～市民活動家との対話の会

「満蒙開拓」の史実の伝承、 研究と日中の民衆の「和解」

長野県下伊那郡阿智村の満蒙開拓平和祈念館は、いわゆる旧「満洲国」に国策として送り込まれた入植者（「満蒙開拓移民」）を最も多く送出した長野県南部に特化した記念館である。1931年の満洲事変から太平洋戦争での敗戦にかけて、「満蒙開拓団」として約27万人の日本農民が旧「満洲国」の農村に送り込まれ、敗戦後の引揚げのが、だがその実態は現地住民の土地・家屋を奪い入植する「侵略」であった。また入植地での農業経営は、現地住民の雇農や小作に頼る「植民地経営」であった。

日本の敗戦を機に現地住民は蜂起して日本人移民集落を「襲撃」し、「自分の土地・家屋」を奪い返した。これにソ連軍の侵攻や集団引揚げの遅れが重なり、引揚げの過程で約8万人が死亡したという。

このような「引揚げの悲劇」は、戦後日本におけるアジア・太平洋戦争をめぐる「侵略の否認」と表裏一体の「被害者意識の肥大化」をもたらした。日本社会が満洲移民の被害者性を強調する一方で、侵略を受けた中国社会は、帝国日本の「侵略性」と戦後日本の「侵略の否認」に対して、強い反発をもって応じている。つまり満洲移民は「入植の侵略性」と「引揚げの被害性」が併存することで、日中の歴史認識の対立を構成する重要な歴史的事実である。

今回お招きした寺沢秀文さんは、満蒙開拓平和記念館が民間主導で創設された時の中核となった方である。記念館において特筆すべきは、満洲移民の「被害」と「加害」の両側面に触れ、「満洲移民の侵略性」も重視していることである。寺沢さんに「なぜ被害だけでなく侵略性などの加害をも重視してきたか」を中心に、「記念館の思想」について語ってもらい、侵略と和解の問題についての認識を深めたい。

ゲストスピーカー：寺沢秀文さん（満蒙開拓平和祈念館・理事）

日時：12月9日（土） 10～12時

場所：早稲田大学早稲田キャンパス・14号館960室

主催：科研費新学術領域研究「市民による歴史問題の和解をめぐる活動とその可能性についての研究」

連絡先：14no510bj@gmail.com（山本）